

2026 年 2 月 7 日（土）ときわ湖水ホール

UBE 現代日本彫刻展 2027 一次審査 選考会講評

水沢 勉（委員長） / 美術史家、美術評論家

30 回のビエンナーレを経て、トリエンナーレという形式になったため、新しい表現を求め
るべきと考えた。2024 年から 2027 年、その次は 2030 年に開催される流れである。今後さ
らに別の戦争が起きるなど、予想できない時間が経過するかもしれない。前回大賞を受賞し
た渡久地佑弥さんは、あの時点では九州産業大学院生だった。前回の大賞はまさに賞の未来
形を予感させてくれた。今回もそういった平和で文化的な未来の方向に進むことができた
と思っている。

植松 奎二 / 彫刻家

最後の入選模型 30 点の中に私が最初から入選枠に推薦した作品が 10 数点以上入ってい
た。今回の審査は作品数も多く選考するのが大変難しかった。飛び抜けた優秀作が数少な
かったと思う。審査の難しさは、作品から彫刻に対する新しい考え方と可能性が見られるかど
うか、という点にある。最後の投票では一人 5 点ずつ選ぶのだが、絞り込むのは特に難しか
った。見て行く中で「みずがたまる」という作品に気がついた。選考時にはフォルムや素材
からコンセプトも想像していたが、もう一度タイトル、コンセプトを読みなおして、この作
品は自然との関わりをテーマにし彫刻の新しい可能性を見出せる作品であると思った。そ
して最後に投票出来て良かった。

日沼 禎子 / 女子美術大学教授

前委員長の酒井先生から毎回審査の時にいただいていた金言を思い出しつつ、私なりの視
点から魅力を感じたり、強く興味を惹かれたりした作品の中から、できる限り既視感のない
作品に最後まで投票した。最終的に全体的にバランスの良い作品が集まったと思う。実物作
品を見られるのを楽しみにしている。

藤原 徹平 / 建築家、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授

現代美術的なアプローチによる作品や UBE ビエンナーレから続く物質感のある作品、ただ物の迫力がすごい、という作品、あるいは近年増えているかわいい感じの市民に愛される作品など、様々な作品があって評価が難しいが、どの作品にも魅力があった。過去の彫刻展では、マケットの方がよかったね、となってしまう作品があった。マケットが既に作品になっていて、そこまで大きくする必要がないと思うものもある。

河野 通孝 / 山口県立萩美術館・浦上記念館館長

建築的な作品や、屋外彫刻ならではのモニュメンタルな作品、コンセプチュアルな作品、オブジェ的な作品、また観客参加型の作品などなど。この多様な作品群を前にして、一旦、用意したはずの評価軸は常に揺さぶられ、揺さぶられた後にまた作品を見つめ直すという作業を幾度も繰り返しながらか審査を終えた。入選となった作品の中には、私が評価できなかったものもあるし、落選となった作品のなかに、私が評価したものも少なからずある。そのなかで、特に印象に残ったのは、残念ながら落選となったが、絶滅危惧種の動物の足跡を協働作業によって地面に形づくり、そのカタチや大きさから、大地に立ちあがって闊歩する動物を想像させるという参加型の作品である。作家性が希薄で、不可視だけれども、作品の上を歩いている人間がふと気が付いたとたん、命を体感できるかもしれないという、その振れ幅そのものが屋外彫刻におけるひとつの可能性のようにも感じられた。

長門 佐季 / 神奈川県立近代美術館館長

今回初めて審査したが、マケットを見ながら実際にどのような作品になるのかを想像しつつ、様々な視点から、ということで難しい審査だった。実物作品になって展示されるのを楽しみにしている。

那須 孝幸 / 北九州市立美術館学芸課長

審査には初めて参加したが、15 年前の彫刻展 50 周年を記念する展覧会を北九州で開催したことがある。その時にも作品を選んだが、今回は実制作に至るかどうかが、という瀬戸際のところに関わるという意味で見え方が違った。作品は具体、抽象、素材の面でもバラエティに富んでいた。15 年前よりずいぶん優しい印象になり、環境、自然、コミュニケーションといったものに寄り添った作品が増えたと感じた。

野中 明 / 広島市現代美術館副館長

応募数が増え、様々な表現があった。最初 20 点に投票する時に、気づいた時には約 50 点を選んでいて、自分なりに整理していくことが困難だった。それくらい魅力的な作品が多かった、というのが率直な印象である。審査については、選考委員が継続的に見ていることで、「同じような作品を出せば落ちる」「新たなチャレンジをしてほしい」といったメッセージが審査を通じて作家側に伝わる形になっており、有意義な審査になっていると思う。

不動 美里 / 和歌山県立近代美術館館長、姫路市立美術館特任館長

第二次世界大戦後の世界秩序が音を立てて地殻変動を起こしている今、それを敏感に捉えつつ一日一日を真剣に生きるアーティスト達が思いをマケットに託して送ってくれた。選考会は、マケットから発せられる熱量を感じながら「そこに何がみえるか」、審査する我が身が問われる場でもある。今回の出品作からは、表現もモチーフも確かにこれまでとは異なる新しい息吹と変化を感じた。それは、これからの UBE 現代日本彫刻展に賭ける挑戦者達の期待がもたらしたものだだろう。戦後の困難な時代を経て、復興を象徴するスタートを切った宇部の彫刻展は、まちづくりの分野においても重要な影響を与えてきた。閉塞感漂う時代に、力強い希望を感じ取ることができた意義は大きい。

清水 有香 / 毎日新聞社学芸部記者

今回初めて審査に参加した。普段は取材する立場ということもあり、どこを軸にしたらいいのか悩んでいたが、作品のコンセプトや文脈よりも、これってなんだろう、どうやって作られているんだろう、という作品との最初の出会いをまず大事にした。また、実際野外でどんな作品になるのか、彫刻の丘で様々な人々がどのように作品に出会うのかを想像しながら審査した。